

ENDOGASTRIC INDWELLING BALLOON

Patent Number: JP63302863

Publication date: 1988-12-09

Inventor(s): HIROOKA KENJI

Applicant(s): OLYMPUS OPTICAL CO LTD

Requested Patent: JP63302863

Application Number: JP19870138614 19870601

Priority Number(s):

IPC Classification: A61M29/00

EC Classification:

Equivalents:

Abstract

PURPOSE: To certainly recover an unnecessitated endogastric indwelling balloon to the outside of the body in an extremely easy manner, by providing a taking-out protruding part to the outer surface of the balloon.

CONSTITUTION: A plurality of semi-ring shape protruding parts 4 are provided to at least one of both end surfaces 2a, 2b and outer peripheral surface 3 of an endogastric indwelling balloon 1. The endogastric indwelling balloon 1 is stayed in the stomach for a required period and, when said balloon 1 becomes unnecessary to be recovered, the balloon 1 is punctured with a needle like forceps under the observation through an endoscope to contract the expanded endogastric indwelling balloon 1 and one of the protruding parts 4 is grasped by a scissors like grasping forceps 6 to the outside of the body through said grasping forceps 6.

Data supplied from the esp@cenet database - I2

⑫公開特許公報(A)

昭63-302863

⑤Int.Cl.⁴
A 61 M 29/00識別記号
厅内整理番号
6859-4C

⑬公開 昭和63年(1988)12月9日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

④発明の名称 胃内留置バルーン

⑪特願 昭62-138614

⑫出願 昭62(1987)6月1日

⑬発明者 廣岡 健児 東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号 オリンパス光学工業株式会社内

⑭出願人 オリンパス光学工業株式会社 東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号

⑮代理人 弁理士 藤川 七郎

明細書

1. 発明の名称

胃内留置バルーン

2. 特許請求の範囲

外表面に取出用突出部を設けことを特徴とする
胃内留置バルーン。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は、胃内留置バルーン、詳しくは、経内視鏡的に胃内に挿入され胃内で膨らませて、そのまま留置されることによって、人体の空腹感を補い、食欲を抑制して減量をするためのダイエッタ用の胃内留置バルーンに関する。

【従来の技術】

周知のように、従来のこの種の胃内留置バルーン₂₋₁は、その一例を第6図に示すように、耐酸性ビニール薄膜等からなり、中心に空洞₂₋₂を有するドーナツ状の円筒形形状に形成されているもので、その一端面に空気注入口₂₋₃を有し、約

100cc程度の容量を有している。この留置バ

ルーン₂₋₁を胃内に挿入するときは、予じめ折り畳んで周知のバルーンカテーテル(図示されず)の先端に取り付けて、同バルーンカテーテルを介して経内視鏡的に胃内に挿入し、同バルーンカテーテルを介して、上記空気注入口₂₋₃から空気を注入し、同胃内留置バルーン₂₋₁を第6図の状態に膨脹させた後、そのまま胃内に留置するようになっている。そして、胃内に留置された胃内留置バルーン₂₋₁は、空腹感を軽減させ、食欲を抑制するので、一定期間、例えば数ヶ月程留置されると減量効果が得られるようになっている。

このようにして、上記減量を達成した後は、胃内に留置されているバルーン₂₋₁は体外に回収されるが、この回収作業は内視鏡を介して、先ずヒータプローブで胃内留置バルーン₂₋₁に孔を開け、空気を放出し同バルーンを縮小させたのち、把持鉗子(図示されず)によって、しばんだ状態のバルーンを把持して同バルーンを体外に回収するようしている。

【発明が解決しようとする問題点】

ところで、従来の胃内留置バルーン2_1は、上述したように、減量効果が確認された後、把持钳子により、しばんだ状態の胃内留置バルーン2_1を把持し、これを胃内部から体外に取り出して回収するようになっていたが、上記胃内留置バルーン2_1の表面は平滑で胃粘液等が付着しているので滑り易く、これを把持钳子によってしっかりと把持することは容易でなく、極めて厄介であり、回収中に外れてしまい回収が困難になるという欠点を有していた。

本発明の目的は、上記欠点に鑑み、減量効果を達成して不要となった上記胃内留置バルーンを極めて容易に確実に体外に回収できるようにした胃内留置バルーンを提供するにある。

【問題点を解決するための手段および作用】

本発明は、上記目的を達成するために、胃内留置バルーンの表面に取出用突出部を設けたことを特徴とするものであって、この突出部を把持钳子等で把持することによって、使用済のバルーンを

確実に容易に体外に回収するようにしたものである。

【実施例】

以下、本発明を図示の実施例に基づいて説明する。

第1、2図は、本発明の第1実施例を示す胃内留置バルーンの斜視図であって、この胃内留置バルーン1は、その全体形状は上記第6図の従来の胃内留置バルーン2_1と変わるものがないが、その両端面2_a、2_bおよび外周面3の少なくとも一つの面上に複数個の半リング状の突出部4が設けられている。なお、第1図中、符号5は空気注入口を示している。

このように構成された本実施例の胃内留置バルーン1は、所要期間、胃内に留置され、不要となり回収される場合は、内視鏡の観察下で針状钳子等(図示されず)により穿孔し、膨脹している同胃内留置バルーン1を縮小させた後、第2図に示すように、鉗状の把持钳子6で、上記突出部4の一つを把持し、同把持钳子6を介して体外に回収

する。このように、多数の突出部4の一つを上記把持钳子6により把持することは容易であり、把持した把持钳子6により外れるようなことなく、胃内留置バルーン1は極めて容易に、確実に体外に回収することができる。

第3図は、本発明の第2実施例を示す胃内留置バルーンの斜視図である。この胃内留置バルーン1_1も上記第1図の胃内留置バルーン1とほぼ同様に構成されているので、同一構成部材については同一符号を付すに止め、その説明は省略する。この胃内留置バルーン1_1の外周面には上記第1図の胃内留置バルーン1における半リング状の突出部4に替えて耳状の突出部7を設けてある以外は、上記胃内留置バルーン1と全く同様に構成されている。

このように構成された、本実施例の胃内留置バルーン1_1の回収には、縮小した同胃内留置バルーン1_1の上記耳状の突出部7を、上記把持钳子6(第2図参照)または周知のスネアタイプの钳子8で把持して極めて容易に確実に回収すること

ができるという効果が得られる。

第4図は、本発明の第3実施例を示す胃内留置バルーンを一部破断して示した斜視図である。

この胃内留置バルーン1_5も、上記第1、第2実施例の胃内留置バルーン1、1_1とほぼ同様に構成されているので、同一構成部材については同一符号を付すに止め、その説明は省略する。この胃内留置バルーン1_5の前端面2_aにはゴム材等からなる円板状の弾性部材1_0が一体的に設けてあり、同弾性部材1_0には直徑方向のスリット9が設けられている。同スリット9には両端部に抜止用ストッパー1_1_a、1_1_bが設けられた糸状部材1_2が気密的に押通されている。そして、この胃内留置バルーン1_5の回収時以外は、上記糸状部材1_2の大部分が同バルーン1_5の内部に収納され、前部抜止用ストッパー1_1_aと前端部の糸が上記弾性部材1_0を通して前端部2_a外に出ている。

このように構成された本実施例の胃内留置バルーン1_5の回収には、突き破られて縮小した同胃

内留置バルーン1-5の上記糸状部材1-2の外部に
出ている部分を把持鉗子6（第2図参照）等によ
って把持して糸状部材を更に引き出し、これを把
持鉗子6等に巻き付けて引き出せば、同糸状部材
1-2の後部抜止用ストッパー11bが同胃内留置
バルーン1-5の内壁を引掛けてこれを引き出すの
で、糸状部材1-2および把持鉗子6を介して縮小
したバルーンを体外に回収することができる。

なお、本発明は上記各実施例に示すように単に
突出部を設けて、これを機械的に引き出すよう
にしたものに限定されるものでなく、例えば第5図
に示すように、胃内留置バルーンの突出部に代え
て、磁石板1-3を用いるようにしても良い。この
ように胃内留置バルーン1-6の外周面に多数の
磁石板1-3を設けることによって、同磁石板1-3
を把持鉗子（一般に金属製品である）に吸着させ
るようにも良く、更に把持鉗子にも磁性を持
たせることによって、胃内留置バルーンの把持、
回収を一層容易にすることもできる。

【発明の効果】

以上説明したように本発明によれば、胃内留置
バルーンの回収作業における、同バルーンの把持
・取出作業性が大幅に向ふし、患者の苦痛、術者
の疲労を大幅に軽減する極めて便利な胃内留置バ
ルーンを提供することができる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は、本発明の第1実施例を示す胃内留置
バルーンの斜視図、

第2図は、上記第1図の胃内留置バルーンの回
収時の把持態様を示す要部拡大斜視図、

第3図は、本発明の第2実施例を示す胃内留置
バルーンの斜視図、

第4図は、本発明の第3実施例を示す胃内留置
バルーンを一部破断して示した斜視図、

第5図は、本発明の他の例を示す胃内留置バル
ーンの斜視図、

第6図は、従来の胃内留置バルーンの一例を示
す斜視図である。

1, 11, 15, 16, 21……胃内留置バルーン

4, 7………突出部

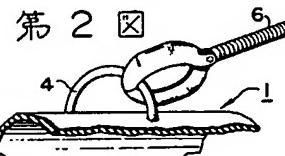
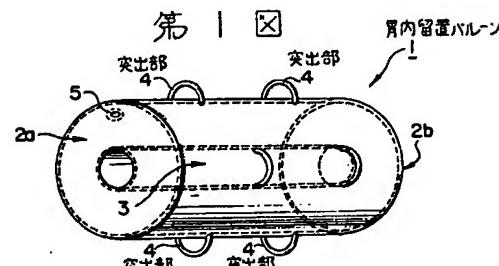
1-2………糸状部材（突出部）

特許出願人

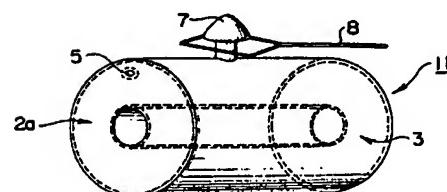
オリンパス光学工業株式会社

代理 人

藤川七郎

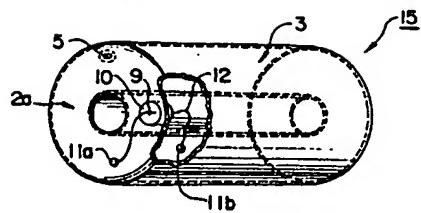


第3図

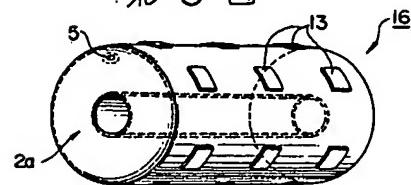


BEST AVAILABLE COPY

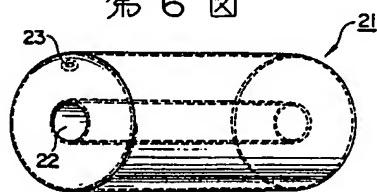
第4図



第5図



第6図



BEST AVAILABLE COPY